



竹内栖鳳《班猫》(重要文化財)

2010年2月6日(土)～3月28日(日)

〔月曜日休館(但し、3/22は開館、翌火曜日休館)〕

主催：山種美術館、日本経済新聞社

開館時間

午前10時から午後5時(入館は4時30分まで)

入館料

一般1200円(1000円)・大高生900円(800円)・中学生以下無料

※()内は20名以上の団体料金

※障害者手帳ご提示の方、およびその介護者(1名)は無料

※本展覧会は特別展のため、通常展とは料金が異なります。

主な出品作品

東(東京画壇)：

横山大観《燕山(えんざん)の巻》、《楚水(そすい)の巻》、《作右衛門(さくえもん)の家》、《心神》ほか
橋本雅邦《松林山水》、下村観山《老松白藤》、川合玉堂《鶺鴒》、
菱田春草《釣帰(ちょうぎ)》、鍋木清方《伽羅(きゃら)》、
今村紫紅《大原の奥》、小林古径《清姫》、安田靉彦《出陣の舞》、
川端龍子《鳴門》、前田青邨《異装行列の信長》ほか

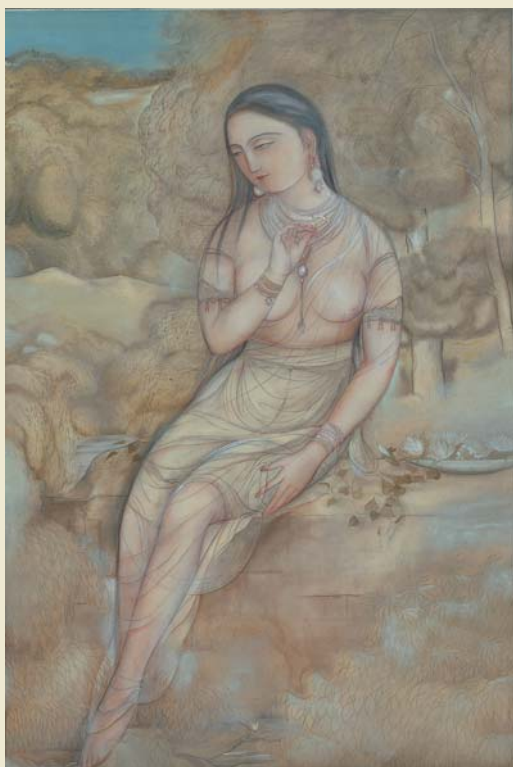
西(京都画壇)：

竹内栖鳳《班猫(はんびょう)》(重要文化財)、《潮来小暑(いたこしょうしょ)》、《蛙と蜻蛉》、《憩える車》ほか
上村松園《新蛩》、西村五雲《晨雪》、菊池契月《紀貫之》、
西山翠嶂《狗子(くし)》、橋本関雪《霜の朝》、土田麦僊《大原女》、
村上華岳《裸婦図》、小野竹喬《晨朝》、福田平八郎《花菖蒲》ほか

※出品作品は変更になる場合があります。



横山大観《作右衛門の家》



村上華岳 <裸婦図>

横山大観（たいかん）と竹内栖鳳（せいほう）は、「東の大観、西の栖鳳」と並び称せられ、明治以降の日本画の革新をリードしてきました。日本画壇の双璧、東京画壇と京都画壇の総帥、狩野派と円山四条派、東京美術学校と京都府画学校というように、常に対比されることの多い二人は、一画家としてのみならず指導者として重要な役割を果たしました。

本展覧会では、明治、大正、昭和を通じて、東京と京都のそれぞれの伝統の上に立ちながら、日本画の革新に努めた二人の画家の画業を振り返るとともに、その周辺の画家たちの作品も展覧します。東京画壇からは、大観の師である橋本雅邦、盟友である下村観山や菱田春草、院展の小林古径、安田靉彦（ゆきひこ）、前田青邨（せいそん）らの作品を、京都画壇からは、菊池契月や栖鳳の私塾である竹杖会（ちくじょうかい）の作家一上村松園、西村五雲など、京都府画学校の教え子一村上華岳、福田平八郎らの作品を展示いたします。

今回は特に当館所蔵の大観作《燕山の巻》（全長 17m余）《楚水の巻》（全長 14m余）の二大絵巻を全編公開いたします（会期中展示替あり）。1910（明治 43）年 6 月より約 2 ヶ月間の中国滞在の体験から、大観はその年の 10 月の第 4 回文展に《楚水の巻》を発表、12 月に《燕山の巻》を完成しています。これらの作品は大観にとって初めての本格的な水墨画卷であり、後に《生々流転》〔1923（大正 12）年 東京国立近代美術館蔵〕へと発展していく途上の重要な作品です。また、当館所蔵作品の中でも特に人気が高い栖鳳作《班猫》（重要文化財）を 2 年ぶりに展示します。毛づくろいをしながらこちらをじっと見つめるグリーンの瞳の猫。墨、胡粉、金泥などで描かれた猫の毛の柔らかな質感は、思わず触れてみたくなるほどです。栖鳳の細やかな筆づかいを間近にご覧ください。

同時代を歩み、それぞれ独自の絵画世界を打ち立てながら、常に近代日本画壇の中心的存在であり続けた大観と栖鳳。この二人の作品を軸に東西の作家を加えた、当館所蔵品の選りすぐりの作品を通して、日本画を再発見していただければ幸いです。



小林古径 <清姫>のうち「日高川」



上村松園 <新蛭>

山種美術館
Yamatane Museum of Art